

知事と県民の意見交換会（秋田地域振興局）議事要旨

- テーマ : アフターコロナの社会生活とは！
- 日 時 : 令和4年7月1日（水）10:00～12:00
- 場 所 : 秋田県立大学 秋田キャンパス図書館 ラーニングcommons

● 参加者

- A氏 （ノースアジア大学経済学部・経済学科3年）
- B氏 （日本赤十字秋田看護大学看護学部・看護学科4年）
- C氏 （秋田大学医学部・保健学科看護学専攻4年）
- D氏 （国際教養大学国際教養学部グローバル・スタディズ領域4年）
- E氏 （秋田県立大学生物資源科学部・生物環境科学科4年）
- F氏 （秋田公立美術大学美術学部・美術学科ビジュアルアーツ専攻4年）

佐 竹 敬 久（秋田県知事）

伊 藤 淳 一（秋田地域振興局長）

知事挨拶

様々な意味でパラダイムシフトが起きています。コロナ禍前からの第4次産業革命やグローバルズムをはじめ様々な面で価値観が変わってきています。

また少子高齢化や労働力不足、経済の弱体化により日本は岐路に立たされています。そういう中で、100年に1度というこの感染症の世界的な流行、歴史を見ても様々な面で社会の変異を起こします。今、様々な意味で日本も地方も大きな課題に直面しています。日本は戦争がないだけであって、実は有事です。これから歴史が大きく変わるときは、いつも若い方が主導権を握ります。明治維新も20代の方々が明治政府という日本の新しい形を作りました。これまでの既成概念が大きく変わりますので、若い人の様々な考えを基本にしながら、政治も行政もビジネスも進めていかないと、とても時代に追いつけません。

今日は、このアフターコロナの社会だけでなく国際情勢も変容する今の時代を捉えて、これから社会がどうなるか皆さんの様々の意見を伺いたい。また皆さんが10年後20年後この地域や日本をどのような形にしたいか、あるいは夢や希望をお聞きすることによって、私も行政の様々な政策に反映したいので教えていただきたい。75年間生きていますので、様々なことに遭遇し経験もあります。もしかしたら私からアドバイスする可能性もありますが、まず皆さんの率直な意見をお聞きしたいと思います。

参加者自己紹介

(局長)

それでは、意見交換をしていただきます。最初に、皆さん6人の方から自己紹介をしていただきます。

(A氏)

私は経済学部の経済学科に所属し、現在大学3年生です。ゼミナール協議会に所属し会長をしています。今日は皆さんといろいろな意見を交換して、私の考えを柔軟に変えていけたり、皆さんの意見を取り入れて、よりよい会にできたらいいと思います。岩手県奥州市出身で、いつも大谷翔平君と同じ出身と言っています。出身高校は岩手県立岩谷堂高等学校というところで、ウエイトリフティングが全国一位になるくらい強いところです。

(B氏)

私は小学校から高校まで野球をしていました。今、大学では、看護に必要な知識や技術を学び、統合実習の前なので、いろいろな分野の内容の復習を行っているところです。今日は、ほかの方々の意見を聞いて、自分の意見を深められるようにしていきたいと思います。

秋田県北秋田市出身で、出身高校は能代高校です。

(C氏)

出身は大館市で、大館鳳鳴高校卒業です。現在は看護学を学んでいて、座学や実習を通して具体的な看護技術や看護される方へどのような援助ができるのか学んでいます。また保健師コースも履修しているので、地域の人々に予防の観点で関わっていきたいと考えております。今日の会を通して自身の考えをもっと深めることができたらよいと思います。

(D氏)

出身は愛知県の蒲郡市です。海とみかんが有名な町です。出身高校は愛知県立国府高等学校です。今学んでいることはメディア関係で、新聞、テレビ、SNSなどが人にどのような影響を与えるのか勉強しています。今は竿燈にはまっています。竿燈まつりもあと1か月なので、そちらにも熱が入っている状況です。秋田で楽しみながら4年間を過ごしてきました。今日は知事とお話ができるということで、すごく楽しみにしてまいりました。

(E氏)

出身は岩手県北上市で、出身高校は岩手県立黒沢尻北高校です。現在、私は自然環境や生物資源について学んでいます。特にその中でも土壌生態学に興味を持ちました。現在は土壌研究室に所属しており、卒業研究は、福島原発事故後の除染後農地において、除染された

土地での農地を回復する研究に力を注いでいます。本日は様々な分野の学生さんが参加しており、自分とは違った視点でコロナ禍や今後の状況について新しい意見が聞ける機会です。理解を深めていきたいと思えます。

(F氏)

私は出身が神奈川県藤沢市で「よくそんなところから来たね」と何度も言われますが、海も、川も、山もあるところなので、全然ここと変わらないと自分では思っています。高校時代はカナダに3年間おり、帰国後は美術大学に行きたいと思い、この秋田公立美術大学に入学しました。専門性よりも横断領域的にいろいろなところから自分のテーマを見つけて、一つの彫刻とか絵画だけではなく、様々な方法で作品制作の表現をしようと学校で学んでいます。

現在の主な活動は、卒業制作です。卒業制作は畑から作るものづくりということで、大仙市に住み、知り合いの畑を2反歩くらい借りて研究をしています。卒業後も農家を続けたいという気持ちがあり、今は就職活動ではなく、就農活動をどうするかいろいろ悩みながら動いています。今日は様々な方がいますので、領域も世代も横断してみんなと話せたらよいと思えます。

(局長)

最初に、コロナ禍における学生生活の現状はどのようになっているのか。それについてどのように捉えているのか。今回は3年生が1名だけで、他の方はみんな4年生ですが、4年生の方は1年生のときはコロナ前、2年、3年のときはコロナ後になりますので、その違いなどもお話しいただければと思えます。

(A氏)

私は、大学に入学したときにコロナが流行り始め、ゴールデンウィークを含めた4月から5月にかけての約20日間が休校になりましたが、それ以降はずっと対面で授業を行っています。周りの大学がオンライン授業の中で、自分たちは授業を対面で受けたり、友達に会えたということは、すごく良かったと感じますが、Zoomを使う経験やオンライン上で作業するという経験がほとんどない状況でしたので、Zoomなどを使う機会は少し欲しかったというのが正直な気持ちです。

(B氏)

私は2年生のときから、授業がオンライン授業になりました。2年生のときは、前半が、完全にオンライン授業で、後半は週ごとに対面とオンラインの交互授業でした。3年生のときは、完全にオンライン授業で、4年生になって、やっと対面でできたという形です。実習に関しては2年生のときは完全に学内実習で、紙上事例だったりシミュレーターを使って

行われていました。3、4年生時も、実習の時間が短くなったほか、コロナウイルスの影響で施設が受入れをできなくなり中止になりました。実際にその患者さんに接するという機会が少なかったため、将来、実際に自分が現場に立ったときに、きちんとできるのかという不安は、今でもまだ残っています。また、県外に自由に行けなくなったことで、旅行に行けなかったり、結構家にいる時間が長くなり、いろいろストレスがたまったことがコロナ禍の学生生活の中でありました。

(C氏)

一年生の頃はコロナ流行前だったので、授業は対面で、サークル活動も普通に行われていましたが、2年生のころからは全部オンライン授業に切り替わりました。感染状況に応じて看護の技術演習やテストなどは、対面で行われることもありましたが、基本的に3年時終了までは、授業は全て遠隔形式でした。行動も制限されるようになって、友人と学校で毎日楽しく顔を合わせたりサークル活動に参加したりという、大学入学前に描いていたキャンパスライフからはかけ離れたものになったなと感じていました。医学部のキャンパスは今年から対面授業が本格的に再開していて、流行当初は、世界的流行による先の見えない不安というものが大きかったです。あとは、オンライン授業だったので、私の友人や周りの人も、通信環境に不安を抱いている人も多かったと思います。

現在の学校生活は、コロナ前の状態に少しずつ戻りつつあるなと感じていますが、流行が完全に収束したわけではないので、これからも感染対策は続けていかなければいけないと感じています。

(D氏)

国際教養大学では、この4月から、対面での授業やサークル活動ができるようになりました。2020年4月に、大学内の寮から退寮して実家に戻るよう指示が出ていたので、1年間愛知の実家でオンライン授業を受ける生活をしていました。2021年4月に実家生活に嫌気がさして秋田に行きたいと思い、自分で仁井田にアパートを借り一人暮らしを始めました。その後もオンライン授業が続いていましたので、実質的に2年間の授業はオンラインでした。もともと2020年8月から1年間の留学を予定していましたが、なくなってしまいすごく残念に感じています。この3年間は、コロナ禍の生活の中で自分が思い描いていた留学という一番楽しみにしていた部分を楽しめなかったのが悔しく、でもどうしていいのかわからない虚無感もあり、歯がゆい思いをした3年間だと思います。今はサークル活動はできませんが、飲み会は気にしている状況で、自分が思い描いていたサークル活動や学生生活とは少し違った形になってしまい、戸惑いもあるのが正直な気持ちです。冬のコロナが流行る直前から留学に行っていた人もいましたが、その人たちも、「2、3か月で帰国しろ」という指示が出てしまい本当に中途半端な状態で帰国をした人が多かったと思います。今はやっと

留学ができるようになりましたが、基本的に自分の学年ともう一つ下の学年はほとんど留学に行っていないと思います。ゴールデンウィーク明けには、海外からの留学生がコロナ以前よりは少人数ですが来てくれて竿燈を一緒に行った留学生もいました。逆に国際教養大から、ヨーロッパやアメリカ、アジアに行っている友達もいますので、自分自身が行けなかったのは悔しい思いはありますが、少しずつもとの形に戻ってきていると感じています。

(E氏)

一年生は普通の大学生活を送っていました。2年生はゴールデンウィークから8月にかけてリモート授業になり、後期の10月からは普通の対面授業に切り替わりました。実験や実習の機会が減ったため、先生が実験キットを用意して家でもできる実験を教わりました。リモートだと、実験実習の経験が足りないで、その経験をしていない世代へのフォローがもう少しあれば、自分たちの経験値も上がったのではないかと思います。就活においては、対面のインターンがなかなか開催できないところが多かったので、職場の雰囲気とかも対面よりは伝わりづらいですし、企業側の方でも学生に伝える技量が求められたのではないかと思います。また学生自身も、自分から能動的に行動して発言していかないと知る機会も全然得られないと感じました。

(F氏)

思い描いていたキャンパスライフとやはり違ったものだったと思います。それでも美術大学では演習、実習、制作の場所は学校が多くて、1年目の5月のゴールデンウィーク明けくらいから、どうしても学校に行かないとできない一部の実習は対面になり、対面とオンラインのハイブリッドの形でしたが、今はほぼ完全に対面に戻っています。東京の美術大学の友達から話を聞くと、キャンパスになかなか入れないようです。首都圏のように人口が密集していて、感染爆発しやすいところだと、キャンパスに入れないから、制作も家の中でしかできないと聞いていた中で、公立美術大学では、一応、時間は制限されていても対面でやれたり、制作もできたりという環境があったので、そう考えると秋田の美術大学で良かったという気持ちはあります。Zoomでの座学の授業に慣れてしまったので、今は朝、一限8時50分から学校に足を運ぶのが辛い学生が多くて、この前その授業の最初で先生が一限の出席率が悪いと言っていました。私は、むしろ座学はZoomで良かったと思っている方です。

(知事)

この感染症ではないが、大学に行けなかったことがありました。55年前の大学紛争時です。当時、私は大学2年生です。半年間、大学が封鎖され学校に行けません。Zoomもないので、ただ家で勉強していました。今話を聞いて当時のことを思い出しました。

(局長)

さっき最後にFさんがおっしゃったみたいに、Zoomで十分ではないかというものはありますか。

(D氏)

僕も正直なところ、Zoomによるオンライン授業に慣れてしまい、朝起きるのが辛く感じます。今プログラミング授業では、家にパソコンがあってそれをZoomの画面に投影して教授に見てもらえばすぐできますが、わざわざノートパソコンを家から持参して教室で開いて打って、また画面を開いて見てもらうというところがすごく非効率的に感じます。家からできるのなら、そこでやれば時短にもなりますし、教授も生徒も負担が減ります。対面でコミュニケーションをとることも大事ですが、それ以上にお互いの負担を減らすために、もっとオンラインが活用できたらよいのではないかと、コロナ禍でのオンライン授業の体験を通じてそれに気が付いたと思います。

(C氏)

リモート授業を通して、気が付きました。リモート授業だからこそオンデマンドにする形にしてビデオを撮ってもらうとか、自分で時間を決めて授業を受けるという形にすれば、他に時間を割けたり、有効活用もできると思います。授業を夜に受けたい場合でも、ビデオがあれば、その決まった時間に受けなくても見られるという便利さもあるので、座学だけの授業はリモートに変わってもいいと思います。

(局長)

自分自身は、大学の授業は全て座学の経験しかないので、今の話は非常に衝撃的な感じでした。今の大学生活へのコロナの影響というものを経験した上で、アフターコロナの社会といたったものが、コロナ以前の社会に比べてどのように変わっていくのか、またそのことについて考えていることをお話してください。

(A氏)

デスクワークの方には、テレワークが普及したと思うので、自宅から仕事をするとか、例えばカフェなどで仕事をする方が多いと聞くので、場所にとらわれずに仕事できるという点は、アフターコロナの社会でも継続されるのではないかと考えます。大学の教授の話を聞くと、場所にとられないからこそ、地方に移住して仕事をしたり、自然を感じたいという点があって、都会の人では疲れたから地方に移住してたまに会社するみたいな形をしたい人もいらっしゃるのでは、場所や時間にとらわれず、自分の好きなように仕事ができる社会になっていくと考えます。

(B氏)

人の顔を認識できない状況が続いていくのではないかと思いました。今はマスクをつけることが当たり前で、目しか分からない状況なので、外したときに初めて顔全体を見ることができます。日本では、まだマスクを外すことに対して抵抗を感じたり、秋田の県民性かもしれないませんが、少し違うことをすると目立って、当たりが強くなることもあるので、まだまだ相手の顔を認識できない状態は続くだろうと思いました。

(C氏)

現在対面授業が始まりつつありますが、今後も対面と遠隔のよい部分をかけ合わせながら、感染状況に応じて柔軟に対応していくと考えます。社会においても、リモートワークなどが広く導入され、本人のライフスタイルに合わせた働き方ができるようになったと感じています。実際に実習に行った際にも、リモートワークだから秋田の実家に帰って親の介護をしている方がいましたので、このような長所はこれからも生かされていくと考えます。コロナ禍により遠隔医療などの技術が進歩しており、秋田は少子高齢化や医師が足りないという問題もあるので、過疎地の方では遠隔医療がより発展するのではないかと考えます。

(D氏)

多様な生活スタイルがこれから生まれて、それぞれの人が自分に合った生活スタイルを選べるような社会が来るのではないかと予想します。コロナ禍以前にはこれまでノーマルな生活として見ていた飲みニケーションや、転勤ありきの会社員生活は、今の若者の間で少しノーマルではなくなってきたと感じています。これは、テレワークや、地方に住み働くという考えであったり、今までと少し変わった考え方を皆さんが持つようになったことによると感じています。どれが正しいとかではなくて、自分に何が合うのか、例えば自分は現場で働きたいのか、それとも、テレワークで働きたいのかを問いかけて、その中で自分に合うものを選ぶ。そして、もっと自分が過ごしやすい働き方、生き方を追求していくのがこれからのアフターコロナの社会になっていく。正解となるような生き方を求めていくのではなくて、自分に合ったものを選んでいくような生活スタイルの多様性が今後の社会のトレンドになっていくと学生として感じました。

(E氏)

教育方針や働き方が多様化していくと思います。リモート授業の導入はうまく活用することができれば、無駄な時間を省くこともできます。働き方についても、在宅ワークの増加によって副業が増えたり、これまでと違った働き方もできると思いました。リモート授業や、就活のリモートインターンをする、便利ですけれども、画面だと会話の空気感が伝わりづらいく感じます。対面で人と話したときに視線や声の調子で人の温かみを知ることもでき

たので、全部が全部リモートというわけではない多様性が生まれる社会になっていくと思
いました。

(F氏)

就活について、母親や家族に説明したときに、自分が自営業を本当にできるのか心配され
るだろうと、ものすごく構えていました。実際に家族に相談すると、大企業に勤めても出向
したり、移動制限されることで潰れる企業も出てくるなど、今まで予想もできないことが起
こっているので、何が正しいのかはわからないと言われました。この2年間は自分がやりた
いことに理解を示してくれる人も増えた感じがします。ウクライナの戦争により経済も厳
しくなるので、なるべく安定した職業に就くという考えもありますし、その反対もあります
が、経済的に苦しいとその職の選択が難しく、何かそこで支援があったら、もっとやりやす
いと感じています。アフターコロナと世界のカオスの状況の中で自分たちが、どのように求
める理想の暮らしを実際に現実化させていくのかと考えたときに、何らかの社会のサポー
トが得られないか検討してほしいです。

(知事)

リモートの世界は、授業と違って隣の席の友人と話せないのが個の世界ですが、個が行き
過ぎるとバラバラになる。年をとってもやる気があるかどうかで個人の差が出てくる。やる
気のある人と諦める人に、両極分化する。人間はどのような年齢になっても勉強する、学ぶ、
何かにチャレンジする。この心があるかどうかで相当の個人格差や、個人的な生活上の楽し
み方の格差、また経済の格差が発生する。日本全国そんなに簡単に経済状態は悪くならない。
今の日本で経済が遅れている問題はコロナではない。新しい世界に対する革新的なチャレ
ンジに対して、大企業も含めて相当守りに入っている。これから日本がよくなるかどうかは、
その守りをどのように皆さんがブレイクスルーするかにかかってくる。今の時代のような
様々な経験を、今後の世代の人は経験することがないだろうと思う。このいろいろな経験は
プラスとマイナスがあり、そのときにどうするかを前向きに考える体験をした人が、こうい
うパンデミック、あるいは時代の変化を乗り越える力を持つことができる。そういう意味で
皆さんはある程度的確に今の状況や自分の置かれた状況を表現していただいたと思います。
本当に勉強になりました。

(局長)

皆さんのほとんどの方が自分の将来、就職先が決まっているかもしれませんが。就職した会
社に縛られなくてもいいので、将来どのようにしたいか、それが今回のコロナパンデミック
によって影響を受けたのかどうか、お話をしていただければと思います。

(A氏)

インターンに応募したり、自己分析をしました。大学に入る前、就職先は関東のほうがよいと漠然と考えていました。コロナ禍を経験して、都会は人口が多く感染リスクもあり、なかなか家族に会えないこともあるので、就職先は別に都会でなくてもいいのではないかと考え始めて、今、私は東北のどこかに就職できればと東北の企業を調べています。

コロナ禍を経験しましたが、授業は対面でしたので、他の方よりも人と交流する機会が多く、人と話をすることも楽しかったので、営業などの仕事に就きたいと考えています。今後、またコロナのような感染症が出てきて多少の影響があっても、私は人と交流するような仕事に就きたいです。

(B氏)

就職の説明会も、面接も全部オンラインです。私は将来的には救急医療に関わる道に進もうと思い、就職先も全国トップクラスの救急搬送を受け入れている病院を希望しています。その病院では、救急車を受け入れても、二次搬送先が見つからない影響が出ていたようです。

また、コロナ感染者で病床が埋まり、救えたはずの命が救えないような事例が発生した話も伺いました。濃厚接触者が増えたことで医療従事者の数も減り、医療活動に影響が出た話も伺ったので、予想以上に多忙な業務になると感じています。

(C氏)

インターンはほぼ中止になり、説明会はオンラインで参加しました。卒業後は看護師として地域の医療に貢献していく予定です。再流行によって患者数が増加することになれば、出勤できる看護師の人数が限られたり、少ない人数で業務を回していかなければならない状況になっていくと考えます。また、現在は面会の人数も制限されている状態で、医療現場においては常に慎重に行動することが求められるようになると考えます。自分一人の行動が病棟全体にも大きな影響を及ぼすので、医療に携わる者としての自覚を持って、自身が感染しないことはもちろん、患者さんや医療者にも感染させないという意識を持って、普段から予防対策を徹底していくことが必要になると考えます。

(D氏)

私は、東京に本社を置く製造業の会社に入社を予定しています。これまでに培ってきた英語力や、日本の企業を世界に後押ししていくための一翼を担いたいという小さな頃からの目標を持っていましたので、それをコロナ禍の中でも軸として持ち就活しました。コロナの影響があっても、この世界に打ち出していこうとしている会社はどこかということ意識しそこに入社すると決めていました。ただ、正直、進路を考える上ではすごく大きな影響を受けたと思います。具体的には、テレワークの活用ができるかどうかは見えていました。私自身

この4年間で秋田、特に竿燈が好きになり、竿燈に携わりながら働くことが自分の思いとしてあり、世界を相手に仕事をする事と、秋田に根づいて生活することを両立したいので模索はしました。残念ながら、正直そこには結び付きませんでした。コロナ禍の影響で、都会ではなく地方でも自分が働きたいスタイルを追求できる部分があると思うので、秋田に住みながら、自分のしたいことができるかがコロナ禍によって新たに植え付けられた就活におけるポイントだったと感じています。

(E氏)

インターンも面接も全てリモートで行いました。秋田に本社がある食品関連の企業に内定しました。健康食品の納豆や豆腐を生産していますが、コロナ禍で国民の健康意識が上がっていることや、大豆を使った製品で免疫力が高まるということで、納豆が改めて注目されて今後も需要は拡大していく話を伺いました。コロナはマイナスのイメージもありますが、みんなの健康意識が向上したという点でよい一面もあったということは、すごく勉強になりました。分野によっては伸びるところは伸びると思えました。

(F氏)

180度変わるくらいの衝撃がありましたが、起こりうることは全て悪ではなく、それをターニングポイントとして切り替わる場面を大学生のうちに体験できたと思います。

大学教授に、コロナ禍で就職氷河期になると嘆いていたら、こういうことが大学生のうちに起こることはすごくラッキーなことだと言われました。最初は何を言っているかよく分からなくて、もう就職できていたらどれだけ楽だったことかと思ったときもありました。改めてウィルスが蔓延するのはどういうことなのか、本質的なことを考えてみると、今のモノが流通している当たり前だと思っていることに、意外と問題があるということを痛感し、それで自分の一つの答えとして、農業を環境保全型でやりたいという全く予想していない新たな発想が出てきました。もともとは自分の地元の関東圏、首都圏で、せっかく美大に来たのだから何かクリエイティブな食器を創作して仕事をしたいと何となく漠然としたものにとらわれていました。それがこんなにも崩れると、人って変わるんだなとすごく思いました。自分は、コロナ禍の時期に学生生活を送ることができて、このような様々な経験ができてよかったと思います。

(知事)

人間は食べるものがないと大変で、これが一番です。昔から、戦国時代に、水攻め、火攻め、兵糧攻めがあり、水攻めは、いつかは水が引くし泳げばいい。火攻めは、逃げればいい。兵糧攻めがきつくて、人は食べるものがなければどうしようもない。秋田県は農業県だけど、農業が一番日本になくてはならない最も重要な産業です。だから食料安全保障、これが日本

の国には極めて大事ですから、農業をしっかりとやらないと、日本は大変なことになる。頑張ろう。

(局長)

Dさんは、就職した後も竿燈に携われそうですか。

(D氏)

今、大学で竿燈をしています。OB・OG会があり、現役のサポートをしながら、竿燈まつりの4日間に帰ってきて、お祭りに一緒に出る形で携わっている先輩がいます。あとは歴史のある町内竿燈会に籍を置いて、そのメンバーとして竿燈を続けていく方、それこそ、今、タイにいながら町内竿燈会に所属して、祭りのときだけ帰ってくる方もいます。秋田の方が国際教養大で竿燈をしていた人たちに対して、快く受入れをしてくださっている状況なので、僕自身が秋田にいない身でも竿燈に携わらせてもらえる機会が今後もあると思いますし、できるだけ携わりたい。自分が竿燈が好きという気持ちをこれからも持って活動に携わり、将来的にも秋田の伝統芸能の発展に少しでも携われたらよいと考えています。

(A氏)

コロナ禍のおかげで、都会でなくてもよいと考えられるようになりました。私は仕事も大事ですが、意外と家族の方が大事だと思っている人間です。コロナに感染して地方に帰省することができずに、2年ぶりに家族に会えたという話を聞くと、私は別に関東でなくてもよいと考えるようになりました。東北だけで物がたくさんありますし、東北だけでも生きていけると思うので、うまく東北の物を使って東北を伸ばしていけたらいいと考えられるようになりました。

(局長)

逆にBさんとCさんは、看護師の資格を取得して働くと思うので、コロナによる影響というよりはコロナの影響を受けている中に飛び込むような感じだと思いますが、どんな感じですか。

(B氏)

コロナの影響で業務が多忙になっている中に自分も飛び込む感じで、全然想像がつかないような環境に行くことはすごく不安ですが、自分が選んだ道、自分が望んだ道なので、頑張ろうと思います。

(C氏)

実際に実習に行って現場で看護師の方や医療関係者の方がどのように動いているのか体感しているのですが、働くことにまだ少し不安はありますが、自分の使命だと思って、将来は地域の医療に携わっていきたくて考えています。

(局長)

幅広い視点から、アフターコロナ社会はどのようなになるのか。そこでどういった課題があるのか、お話しください。

(A氏)

コロナ禍で、年代を問わず、自分の人生をもう1回考え直す方が増えたということを知り、例えば40代50代の方であれば、この先の自分の人生をどうするのか、この会社のままでよいのかなどを考えていると聞いたので、そのような方々のサポートをできる社会になることを考えています。

あと、教育、医療、農業に関して力を入れていくことが大事だと思います。先ほどから農業とか医療の話が出ていますが、生きていく上ではそこが大事なので、今後のアフターコロナの社会ではそちらに注力してほしいと思います。教育に関しては、今回のコロナ禍で、子供や若者が行動制限されて自分らしく生きられないようになり、人口減少で労働力も減っている中、将来にとって貴重な人材である若者のサポートをもっと社会全体で行っていくことが大事なのではないかなと考えています。あと選挙ですが、若者の投票率が低くて高齢者よりの結果になっている部分があるので、もう少し若者に寄り添った政治をしていく必要があると考えています。

(B氏)

オンラインの授業や仕事が普及したり、家にいる時間が長くなり、子供であってもテレビゲーム、スマートフォンを長時間使う機会が増えたので、視力の低下や目の疲れなど目に問題を抱える人が増えることが一つの課題だと思います。看護師や医療従事者は、他の人に感染させることをいつも気にしているので、心のケアも課題になってくると思います。目の疾患に関しては、視力の低下だったら眼鏡やコンタクトの使用で対応できますが、疲労は体の症状にも出てくると思うので、休息をとってもらえるための呼びかけや周知が大切になると思います。

(C氏)

コロナ感染症に対して正しい理解を持って、正しく恐れていくとともに、他人への思いやりを忘れずに、感染予防対策を行っていくことがこれからも必要になってくると思います。

マスクが外せるようになれば生活が元に戻りつつあると考えるのですが、医療従事者の現場の方はまだ様々な制限があるという話も伺うので、そのような方々にとっても、これまで通りの生活ができるようになっていく時代になればよいと考えます。今日の話し合いを聞いていて、皆さん、コロナ禍において、自分の生活を見つめ直したり、また逆に秋田のよい部分がたくさん見えてきたと思うので、そういうコロナで見た新しい見方とか、働き方とか学び方を、若者が流失してしまう秋田にどのように定着させていくのが今後の課題になると考えます。

(D氏)

多様な生活スタイルが生まれるのがアフターコロナの社会と考えます。自分の人生をしっかりと見つめ直して、自分を生活の中心において、仕事や生活のあり方を考えていくことが、主流になっていく社会になるのではないかと思います。その中の課題は二つあります。まず一つ目が、お互いがそれぞれ異なる生活スタイルを受け入れて尊重し合いながら、生活していくことができるのかという部分です。テレワークの是非に関する議論を見ていると、テレワークがよいものであるのか悪いものであるのか白か黒かをつけようとしています。どちらが正しいか間違いかではなくて、私には何が合うのか、あなたには何が合うのかを自分なりに考えて、そこに対しては、相手に自分と同じものを求めるのではなくて、相手のスタイルをしっかりと尊重して、私はこうだけどあなたは違う、でもそれでもよいので一緒に働いて頑張っていこうという形にならないと多様な生活スタイルは根づいていかず、これまでのスタイルに戻っていくのではないかと思います。それが少し課題であると感じています。また二つ目としては、例えば多様な生活スタイルができたときに、行政や会社などが柔軟に支援できるのかも課題になると感じています。

今ではテレワークで地方に住みながら働く生活スタイルができて、そうしたスタイルに対応して私自身がこれをやりたいって感じたときに行政などから支援が得られるのだろうか、今までと全く違う働き方をしたときに、自分は支援を受けられて、働きやすい、生きやすい生活ができるんだろうかと若者の目線から見て少し不安になるところがあります。行政が、様々な住み方、暮らし方、生活の仕方、働き方に対して柔軟に対応できるようになれば、私自身としても、秋田に戻ってきて秋田で働く夢を実現できると思いますし、是非そうしたい。アフターコロナの社会に、この柔軟性を社会自体が持つことができるのか、私自身が課題に感じている部分であり、また望んでいる部分です。

(E氏)

私は2点、意見があります。1点目は、経済や教育格差が生まれてしまうことです。リモートの導入はすごく便利ですが、生活、ライフスタイルが多様化したことで、一人ひとりの能力が重視される社会になっていくと考えます。週休3日制を設ける会社も出ており、自分

で、一つの会社に勤めるだけでなく、副業として働くライフスタイルも出てきて、週休2日で一つの会社で働いてきた身からすると、週休3日でもいいから、他で収入を補う形で放り投げられる場合も出てくるため、そういった面での経済の格差や、その人のやる気とか、能力次第で、収入の差が生まれてしまうと考えました。教育の面でも、親御さん等の収入によりネット環境で差が出てしまうことや、先生方がリモートを使って教えるのにも能力や技量の差が出てくると思うので、生徒の理解度を向上させることも今後の課題と考えました。2点目は、コロナ禍によって、世界全体で、みんなが同じ問題を抱えたと思います。やはり環境問題を皆どこかで意識はしているけれども、皆さん自分事のように捉えられていなかったことが、このコロナ社会によって明確になったと思います。世界中でコロナが発生、大流行したので、その持続可能な社会の実現をみんなが考えるようになり、コロナだけでなく他の地球環境問題が再認識され始めていると思います。経済活動を抑制することや、大量生産、大量消費からの脱却が、今後の課題と思います。

(F氏)

大量消費による生活を普通のことだとみんなが認識していたことから、このコロナウイルスの蔓延は来ていると思います。地球規模で蔓延することは、スペイン風邪でもなかったと思う。最初のコロナの初期はみんながその原因が何か気にしていたとは思いますが、少しずつ慣れてきて、あるのが当然だとなると、とりあえず臭い物には蓋をしてこれを収束させていこう、というたちごっこ的な対処の仕方になると思います。でも、こんなに不自由な生活をさせられていた2年間、今までの生活スタイルに対して、疑問を問い掛けるようなことをしてきたので、これから少しずつ元に戻っていこうとする力が消えなければよいと思います。

(知事)

多分正解はないと思う。多様性という言葉を使うときに、多様性の中では正解はない。情報化というのは格差社会です。現実に今秋田では人手不足で、ホワイトカラーはものすごく求職は多いけれども、実際はあまりいない。ほとんどの経理、あるいは普通の事務作業はどんどんIT化、AIへシフトしますから、逆に言えば個人の個別の能力を使うようなところへの人材が必要です。創造力や発想力、あるいは特殊な皆さんのような技術技能、そういうものがある人とない人では明確に差が出てくる。自分で考えて、自分で計算して、といった能力は若い方はあるし、若いうちはできるが、年を取るとできない。だから、勉強する人は最後まで生き残ります。是非、皆さんも、何でも今の状況を全てまっすぐに受けとめないで、一旦フィルターにかけて、これはよいことだ、これはちょっと疑問だと全部自分でチェックする、仕分けをすることによって将来いろいろな面で役立つと思います。ただ、完全にこれからは格差社会です。産業も、個人も相当格差ができる。情報化社会というのは格差

社会です。これは当然なんです。まさに今のウクライナの問題も、ウクライナの方が情報をたくさんつかんでいるからロシアより小さいけども、何とか戦っている。情報化は怖い。怖いということは、必ず勝つ人と負ける人がいる。これからはそういう時代ですから、しっかり勉強することです。

(局長)

あらかじめ設定した質問は以上ですが、これを機会に参加者へ聞いてみたいことがありますか。

(D氏)

知事にお伺いしますが、若者の声を届けていくための方法について少し分からない状態です。今日このような場で直接自分の意見を述べる機会があり、思いを率直に述べましたが、例えば私以外の国際教養大学の学生はそういう機会がない状況と感じます。知事から見て、若者の声を届けるためには選挙なのか、それとも他に方法があるのか、若者がこれからどんどん意見を言っていけるような社会になるために、どのようにお考えなのか、お伺いします。

(知事)

選挙中の候補者は、そんなに人と話す機会はない。公約にしてもそんなに細かく書けない。普段もっと時間を取るとしても、別の仕事もたくさんある。議会もあり、全国会議もあるし、そう簡単にはできない。私のプライベートのホームページに、お年寄りから中年ぐらいの方から多くの意見が来る。若い人からは、たまに何かセンセーショナルなことを言うと意見が来ている。最近、ある発言をしたら、バツと来たが、意外と賛成、知事の言うとおりで多い。私が気にしたのは、若い人の方が、逆に言えば、率直に意見を言うけれども、若干突っ込みすぎるときがある。こうだと決めてしまうきらいもある。社会はファジーなところがある。このような会を年に何百回も開くわけにはいかないが、こういう時間は本当に参考になります。後は県のホームページを見てもらえれば、私のブログにもいろいろ書いていますし、受け付けていますので、あまり難しく考えないで意見を提示してほしい。

(F氏)

常日頃思うが、私たちはあと 60 年くらいは無事故で癌がなければ、生きるかもしれない中で、今、ルールを決めている人たちは地域では自分たちよりもっと上の人たちが多い。政策も、どちらかという高齢な方々に寄りがちで、少子高齢化だから、どんどん若者を呼ぼうよと言って外から頑張って呼ぶけれども、一方で、その中で育った人は出て行く。若者にこれから頑張してほしいという言葉はあるけれども、実際はそうではない。支援も、一番お金がない、学校をすぐ卒業した人にはそんなに届かないので、その乖離は何なんだろうと思

います。

(知事)

一般に、やはり高齢化で日本全国でお年寄りの数も多いから、当然、様々な声も大きいということは確かです。あといろいろな制度があるけれども、大半が年金とか医療費、全部お年寄り中心です。昔から、若い方はここが一番困っているところです。これは、あなたが言っているとお矛盾です。少子高齢化をなくすために、様々な支援をするというけれども、どんなに支援をしても勤め先がなければ駄目です。若い人にどんな勤め先がよいのかアンケートをとると、一番多いのは、賃金が高くて自分に合った仕事になります。若い人が首都圏に行くのはやはり仕事のバリエーションが多いからで、地方ではなかなかそうはできない。ベンチャーには県もかなり力を入れているので、うまくいっている若い人もいます。全員に対する給付というよりも、個別のチャレンジへの支援や、地元の企業に就職すれば3年間奨学金の返還を助成する取組も行っています。若い人がよい職場に行けることが一番ですが、日本全国地域によっても差があり、また日本の企業の力が弱まっているということで、そう簡単にはいかない問題です。

(F氏)

去年1年は、北東北の農家に通いながら勉強をする1年間でした。すごく面白い方々もたくさんいるし、若い方でも、学校を卒業して残って、自分で何か始めようと思っている。そういう意味で、東京などは、もう全てがやり尽くされていて自分が取り組む必要がないという環境です。でも東北などの地方はまだやられていないことがたくさんあって、そこに若者が自分の発想で取り組める余地がたくさん残っているから、すごく可能性があると思います。だから、自分も残りたいという気持ちもあり、同じような人もたくさんいるのでこれから楽しみで希望がたくさんあります。それと同時に農業を続けていけるように何か支援があれば、すぐには結果が出ないかもしれないけど、長い目で見たときには、よい成果が得られるのではないかと、すごく楽しみです。

(知事)

支援は色々あります。問題は、そこが多分大学に伝わっていない。社会人になる前にそういう支援があるということをもう少し周知する。大学4年生になれば、県や市のチャレンジに対する支援制度があるので、これをPRしていきたい。

(局長)

他にありませんか。時間となりますが、最後に知事からコメントをいただければと思います。

知事総括

4年生の方は、来年3月でいろいろな職場に行きます。どんな仕事も全てなくてはならない仕事ですから、健康に留意してまた頑張ってください。秋田生まれの人は別にして、秋田を離れる方は、できれば秋田を忘れることなく第2の故郷とっていただければ非常に嬉しいです。いずれ、これから数十年、日本が最も厳しくなる。いろいろな面で厳しくなりますから、是非いろいろなことがあっても心を折ることなく、まずは、前向きに生きてほしいと思います。世界的に、猛烈に、競争激化、国際的な対立、気候変動、全部がおかしくなってくる。22世紀までどう生き延びるのか、これは、我々が生きているうちにできることはしますが、今後の10年、20年でできるものではなくて、数十年はかかると思います。世界の運命がかかっていますので、大変なときですが、頑張ってください。

(局長)

時間となりましたので以上をもちまして本日の意見交換は終了させていただきます。